

die „Georg Fuggerischen Erben“社の 企業性格

松 田 緝

1

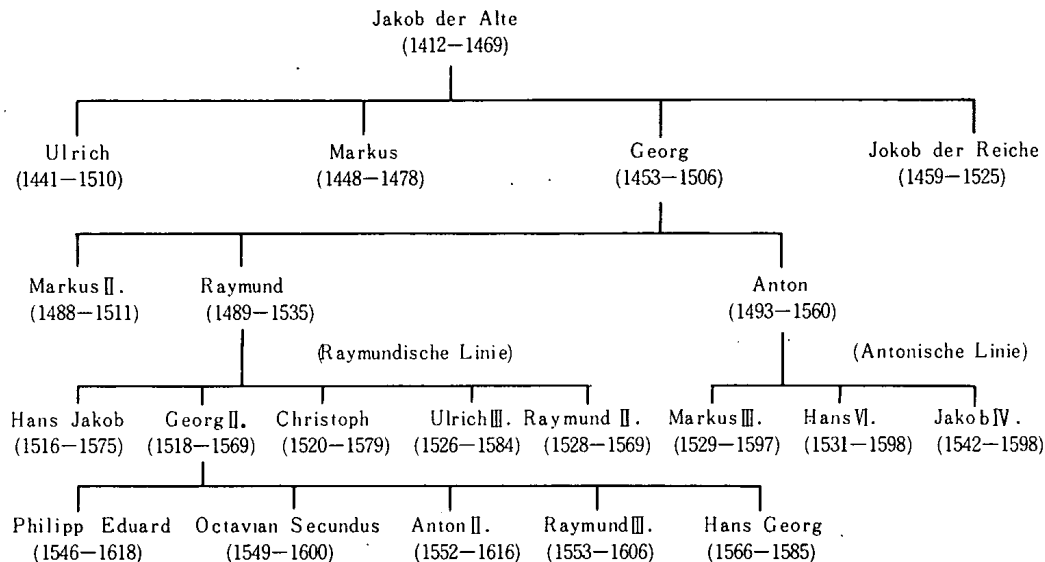
フガー家die Fugger のゲオルク 2 世Georg II. の子供たちが、1578年にマルクス 3 世Markus III. の指揮下にある宗本家 „Anthoni Fugger und Brüders Söhne“ 社から離脱して設立した同族会社die „Georg Fuggerischen Erben“の企業活動に関するモノグラフィーが、ラインハルト・ヒルデブランド¹⁾ Reinhard Hildebrandt により1966年に刊行されたことによって、空隙の大きな16世紀後葉の企業活動の研究史が埋められたのみでなく、富豪ヤーコプ Jakob der Reiche に象徴される南ドイツ大商家の企業性格が、時代と共に如何に変遷したかを示す適例とも思われるので、ここにこの会社の設立の事情、企業活動の概要を観察して、その企業性格を確認してみたい。

1) Reinhard Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“, Kaufmännische Tätigkeit und sozialer Status 1555—1600* は *Schriften zur Wirtschafts- und Sozialgeschichte*, Band 6 として刊行された。

先ずここに取り上げた会社の中心人物であるフガー家ライムント系 Raymundische Linie の兄弟フィリップ・エドゥアルト Philipp Eduard 及びオ

クターヴィアン・ゼクンドゥス Octavian Secundus がフガー本社の「通常取引」der „gemeine Handel“ から離脱する直前のフガー家一族の内部事情及びフガー社の経営状態全般を見てみよう。1525年の富豪ヤーコプの死後、会社の業務はアントン Anton によって指揮されたが、その兄ライムント Raymund は皇帝顧問及び帝国伯としてアウクスブルク Augsburg 市内及び君主の宮廷で一族を代表する任務を担当し、死ぬ少し前にはハンガリア貴族にも叙せられた。この兄弟から由来する二つの家系、ライムント系とアントン系 Antonsche Linie との間の不和が1578年の分裂の基盤となった。²⁾ライムントの三男ゲオルク 2 世 Georg II. は兄ハンス・ヤーコプ Hans Jakob と共にブルジュ Bourges, パドゥア Padua 及びボローニャ Bologna の諸大学に遊学して、人文主義的教養を身につけた後、アントウェルペン Antwerpen のフガー支店で商業教育を受けた。従って彼はアウクスブルクで多くの顕職に就いただけでなく、晩年は1563年から69年の死まで、アントン系の従兄弟マルクス 3 世と共に共同管理者としてフガー社経営の指揮を取った。従ってゲオルク 2 世が、その息子たちに同じような教育を与えようとしたことは肯けることで、こうしてフィリップ・エドゥアルトとオクターヴィアン・ゼクンドゥスは幼い頃からインゴルシュタット Ingolstadt に送られてラテン語を学び、更にバーゼル Basel, パドゥア, ボローニャ, ローマ等に遊学した後、アントウェルペンのフガー支店で商業実習を受けたのである。両人は1574年以降、父の死後からの後見人であったアントン系のマルクス 3 世及びハンス 6 世 Hans VI. の手を離れて独立すると共に、弟たちの後見人となった。独り立ちとなった両人がフガー社の経営に対して応分の参加を要求したのは当然のことであったが、1569年以降只一人の「取締役」„Regierer“ として会社を指揮していたマルクス 3 世は、その独裁的支配権を放棄しようとはしなかった。こうして発生したフガー家内の両家系の分裂を理解するためには、それ迄のフガー社の経営指導を巡る経緯を一瞥する必要がある。

2)ここで「百合の」„von der Lilie“ フガー家の家系を、本稿に必要な人物を主として図示しておこう。



本来フガー社の企業の基幹を成した「通常取引」は、人的 persönlich な性格を漸次失なって物的 dinglich な色彩が濃くなり、各株主は利潤の大きさと共に、投資の安全を一層強く要望するようになった。ところで1563年末の資本金は66万グルデン余で、アントン系が63%以上を出していたが、この年のフガー社の決算は 566万グルデン余のバランスで、この決算に計上された1555—63年の純益26万グルデン余は、それ故大部分他人資金で達成された訳だ。尤も他人資金とは云っても、その大部分は「通常取引」の社員が確定利子付預金の形で会社に用立てたものであった。従ってこれらの社員は、その出資金に対する利息が会社の総収益から支払われ、それでも不足な場合は資本金から支払われるが故に、出資の危険が少ない確実な収入を期待できた。こうして彼らは自己の会社の債権者となり、「通常取引」の拡大に関心を抱く株主とは別に、会社の業務経過よりも確実な収入を重視する金利生活者が生じて来たのである。ところで 1563—77年に こういう預金に対して支払われた「利子」„Interesse“を見ると、ライムント系とアントン系は大体同額の確定利子付投資を有していたことが分かる。しかしながら「通常取引」の資本

金出資構成はその後ライムント系の社員が死んだり離脱したりしたため、1577年にはアントン系の社員の出資比率が85%を超えるに至った。⁴⁾従って1569年のゲオルク2世の死後、アントン系の株主が、出資が15%に満たぬ他の社員を排除しようとしたのも理由がないことではなかった。

3)1563年12月31日の「通常取引」の総資本金は 663, 29fl. 45kr. 2 ½h. で、各社員の出資額と比率は次の如くであった。

| | | |
|------------------|-----------------------|-------|
| Antons I. Erben | 421,813fl. 58kr. 5½h. | 63.6% |
| Hans Jakob | 28,608fl. 45kr. 2h | 4.3% |
| Georgs II. Erben | 29,092fl. 05kr. 5½h. | 4.4% |
| Christoph I. | 38,737fl. 57kr. | 5.8% |
| Ulrich III. | 66.980fl. 28kr. | 10.1% |
| Raymund II. | 77,996fl. 30kr. 3½h. | 11.8% |

4)Hans Jakobは1564年、Christoph I.は1572年、Ulrich III.は 1580年にそれぞれ退社し Raymund II. は1569年に死んだので、1577年の出資比率はアントン系の85.2%に対し Gergs II. Erbenは5%, Ulrich III.は 9.8%に過ぎなかった。

マルクス3世が唯一人の「取締役」となったのは、「私と一緒に管理を引き受けることを何度も要請したが誰も…仕事を避けて申し出なかった」からだ⁵⁾と彼は1581年にゲオルク2世の息子たちに説明したが、彼の独裁的支配の論拠は次の如くである。1538年に締結された「通常取引」の期間は6年で、予告がない限り、3年ずつ延長され、1577年迄に予告が生じなかった。それ故マルクス3世は1538年にアントン・フガーが有していた包括的な権限を要求し得る。なる程アントンは1560年7月11日に作成した彼の遺言補足書において、「通常取引」の管理と指揮はライムトン系及びアントン系からそれぞれ1名の「取締役」を出して共同で行なうことを定めた。だがゲオルク2世の死後ライムント系の者は誰もマルクス3世と一緒に共同管理の任務を引き受けようとしなかったのだ。これがマルクス3世の主張であった。

- 5)1581年2月4日にマルクス3世はゲオルク2世の息子たちに宛ててこう書き送った。
 „sich kheiner der Administration neben mir zue unndernemen auff mein vilfältig
 ersuchen erbotten...aus flucht der Arbeit.“ R. Hildebrandt, *Die „Georg Fug-
 gerischen Erben“,* 1966, S. 55.

マルクス3世の独裁的な管理に対するフィリップ・エドゥアルトの批判は、
 すでに1572年にアントウェルペン支店にいた弟オクターヴィアン・ゼクンド
 ムスに宛てた手紙に見られた。その中で彼はマルクスが経験を積んだ株主
 の協力者を見つけられない事情は認めたが、「契約通りに更にもう1人の共
 同管理者を採用するのがよいだろう。それは当然だと私には思われる」と記
 した。⁶⁾ 続いて半月程後の同様の手紙において彼は、マルクスがアントウェル
 ペンに送った指令の内容を知らせてほしいと弟に云っている。何故ならマル
 クスは業務通信を見せたくないからだとして、その独裁的態度に不満を表
 明している。⁷⁾ こうして1578年4月26日付の書翰においてライムント系の兄弟
 たちは、自分たちの家系の者1人を「社同管理」„Coadmini stration“ に加
 えないから、「この非組合的な会社」„dise ungeselligeliche gesellschaft“を
 罷めざるを得ないとして、⁸⁾ これ迄の給付に就いての清算をマルクス3世とそ
 の弟たちに対して要求するに至った。

- 6)1572年4月8日にフィリップ・エドゥアルトはアウクスブルクから弟に宛ててこう記
 した。„es were besser, Marx fugger neme den verträg nach noch ain coadmini-
 stratoren, das dunckte mich selbs lauter.“ R. Hildebrandt, *Die „Georg Fug-
 gerischen Erben“,* 1966, S. 58.

- 7)1572年4月24日のフィリップ・エドゥアルトの弟宛ての手紙。R. Hildebrandt, *a. a.*
O., S. 59.

- 8)*Ebenda*, S. 59.

この解約予告には、経営指導権をめぐる問題の他に、相続財産の取扱いに関

する争いが絡み合っていた。マルクス3世はゲオルク2世ほ会社に対する出資金は総決算 Generalrechnungを行なった後に相続人に清算する方針を堅持した。ライムント系の兄弟たちは父の遺産と会社持分とのこの分離に反対して、会社持分も相続財産の一部であるから、後見期間を過ぎた最終決算において清算すべきものだと言主張した。従って彼らの代表が共同管理者となることは、会社の帳簿を調べることによって、マルクス3世の「秘密管理」 geheime Administration⁹⁾における彼らの持分に対する不利な扱いを防止することを意味した。

9) R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“*, 1966, S. 61.

マルクス3世はライムント系兄弟のこの解約予告に対し、これを承認して彼らを株主から排除することにした。こうして1578年6月に二つの契約が結ばれ、1573年末迄の期間の後見会計はアウクスグルク市長ハンス・ベヒラー Hans Bechlerが作成すること、マルクス3世は1577年末付で総決算を行なうこと、ゲオルク2世の相続人たちの会社持分については「通達書」, Ansagebrief⁹⁾が渡されるが、77年末から通達される迄の期間に対し年5%以内の利子を付けることが定められた。この「通達書」は1580年9月30日に出たが、その中でマルクス3世はゲオルク2世の持分を73,447グルデン54クロイツァーと記した。もちろんこの査定に対しゲオルクの息子たちは異議を唱え、殆んど一年間に亘る文書戦が両者の間に交わされることになった。「通常取引」全般に関する自分の責任を強調するマルクスは「子供たちが望む通りにしてやれば泣きばしない」 „Wann man thuet was die khinder wollen, so greinen sy nit“¹⁰⁾が、そうはできないし、する積りもないとしてゲオルクの息子たちの抗議をつっぱねた。この係争の核心は1569—77年の営業時間にマルクスが計上した純益及び未収勘定の評価にあった。ゲオルク2世の資本金持分は1569年に63,534fl. 6kr. 6½h. とされ、これに1,035fl. 19kr. 5½h.の利益配当が計上されたから、年利約0.2%にしかない。マルクスはこの異常に低い

利益配分の理由として、確定利子付預金に対する利子負担を挙げた。これに対しライムント系の兄弟は、1577年の貸借対照表に示された多額の減価償却と資産再評価が原因だとしたが、フガー社では回収不能債権の確定は「取締」の権限に属していたから、どうにもならなかった。こうして1577年の総決算に対する異議は、結局効果を生ずるに至らなかった。だがフィリップ・エドゥアルトとその弟たちは1584年6月迄に計75万6千グルデン以上の現金を分割払いで受け取る¹¹⁾ことができた。

10) R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“*, 1966, S. 64, 1581年2月4日付けのマルクスの回答文の中に見られる文句である。

11) ゲオルク2世の子供たちのうちアントン2世は1579年に兄たちと手を切り、ライムント3世は生涯兄たちの後見を受け、末弟のハンス・ゲオルクは若死にした。ゲオルク2世のこれら5人の息子の1578年における総財産をヒルデブランドは110万以上と見ている。R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 71, 77.

2

アントン2世を除くゲオルク2世の4人の息子は、こうして父の遺産を基にしてdie „Georg Fuggerischen Erben“ 会社を、アントン系のマルクス3世が支配するフガー社から離脱して設立した。だがこの会社の設立に関する文書は全然残っていない。しかしそれは当座組合的性格の単なる相続団体ではなく、20年に亘る営業を続けた商事会社で、その4人の株主の中でフィリップ・エドゥアルトとオクターヴィアン・ゼクンドウスが業務の執行に当たった。両人は同等の権利を有する「取締」となり、一切の業務通信は両人の名で作られた。そこで先ずこの会社の経営規模を資本金について見てみよう。1587年6月末の総決算は残存3社員 (Philipp Eduard, Octavian Secundus, Raymund III.) の全財産を 1,137,955 fl. 43 kr. としているが、同期の貸

借対照表は 1,859,618fl. 53kr. 4 h. の総資産を掲げ、この中に大口の土地所有を計上している。それゆえ、ヒルデブランドは、総決算では会社で「損益で」*„auf gewin und verlust“* 実際に使われた限りの動産及び不動産のみが含まれていたが、貸借対照表は3兄弟の全財産を挙げ、従って私有財産と会社資本との分離が存したと説明する。¹⁾そこで1589年6月20日の契約で30万グルデンを超える土地財産が分配され、会社の資本金は 793,856fl. 58kr. 1 h. となり、その後社員の引き出しが続いて1595年以降は 409,138fl. 16kr. 6 h. だけが「損益で扱われる」*„auff gewin unnd verlust gehandelt werden“* ことになった。²⁾

1) R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben,“* 1966, S. 83.

2) R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 83.

次にこの会社の経営組織を見てみよう。本社はフィリップ・エドゥアルトの家に置かれ、マドリード Madrid, リスボン Lisboa そして暫くの間ゴア Goa にも支店が開かれた。更にハンブルク Hamburg, ケルン Köln, フランクフルト Frankfurt/Main 及びヴェネツィア Venezia また暫くの間リューベック Lübeck, アムステルダム Amsterdam, ミデルブルク Middelburg 及びアントウェルペンに代理人がいた。本店には経理主任 *Hauptbuchhalter* が業務を統轄し、彼の下に会計係 *Buchhalter*, 出納係 *Kassierer* 及び書記 *Schreiber* がいた。この商会の「使用人」*„Diener“* として20年間に15人の名前が確認され、更に「代理人」*„Agent“* として16名が立証される。使用人が固定給を受け取ったのに対し、代理人は一括額または「手数料」*„Responsion“*, すなわち一般に 0.3～1% を委託業務から受け取った。使用人の中では支店の経営を任ねられた「支配人」*„Faktor“* が、大きな責任を負わされ、経験を積んだ者が任命されたから、その俸給も高く、更に「特別賞与」*„Verehrungen“* の優遇を受けた。

それではこの会社の業務内容は如何なるものであったか。ここに両「取締」

兄弟の経営方針が大きく浮び上がってくる。彼らの考えでは、「買売するのはわれわれの仕事でなく、われわれにふさわしくない」 „diß kauffen und verkauffen ist unserer Profession nit, steet uns nit an,“ 「商品を取引するのはわれわれの仕事でない」 „nit unsers thuen, in waren zuhandlen.“⁴⁾ 従ってこの商会の中心的業務は金融業務であり、その取引先は主として僧俗の封建的大領主であった。

3) 1591年7月20日マドリッド支店長フィリップ・クレル Philipp Krel 宛の手紙に見られる文句。R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“,* 1966, S. 103.

4) 1592年11月26日ミデルブルクのカスパール・トラーデル Kaspar Tradel 宛の手紙。R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 102.

貸付先はバイエルン諸侯、諸修道院長、ハプスブルク家に三大別されるが、そのおのおのについて概略を記すと、次の如くである。

(1) 対バイエルン貸付業務。バイエルン公アルブレヒト5世 Albrecht V. とヴィルヘルム5世 Wilhelm V. に対する債権は商会の1579年の貸借対照表にそれぞれ5万グルデン及び2,000グルデンの金額で初めて現われる。前者はフガー家とヴィテルスバハ Wittelsbach 宮廷との古くからの金融関係の引き継ぎであり、後者は新しくバイエルン統治をこの年引き受けた公に対する好意的貸付らしく、1582年には返済された。ヴィルヘルム5世に対する貸付は1581—90年に重点的に行なわれ計36,000グルデンに上ったが、これは商会が安全有利な貸付先を求める大きな資金を有していたうえ、フガー社の当主マルクスが融資を拒絶する口実にライムント系の離脱を利用したからである。この際兄弟の宗教的立場と土地所有者としての経済的利害はバイエルン公と合致していたことを考慮に入れておくべきであろう。⁶⁾

5) その内訳は、1581年に25,000fl. が貸付けられ、1584年に返済され、1582年には8,000fl.

が5%の利子で貸付けられ1586/87年に分割払いで返済され、更に1590年に3,000fl.が貸付けられて4年後に返済された。R. Hildebrandt, *Die Georg Fuggerischen Erben*, 1966, S.105—106.

- 6)「アウクスブルクとウルムの間にある彼ら〔フガー兄弟〕の伯領及び所領は両帝国都市からの新教的影響を全く遮蔽することはできなかった。確信ある積極的な旧教徒として彼らは——アウクスブルクにジェスイット神学校を設立した例で示されたように——反宗教改革を強力に支援することによって彼らの領主的地位の強化を期待できた」R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 110.

(2) 対修道院貸付業務、南ドイツの諸修道院に対する会社の債権は、1579年の相続に由来し、ロッゲンブルク Roggenburg, ツヴィーフェルテン Zwiefalten 及びヴィプリングェン Wiblingen の諸修道院に対する貸付金額は8,000グルデンに上った。その他にヴィプリングェンの修道院長と修道士総会は更に同額を借入れ、またカイスハイム Kaisheim の修道院長も2,000グルデンの貸付を受けた。これらにはすべて5%の年利息が付けられたが、フガー兄弟の所領拡大の意図と結びついている点が特徴である。

(3) 対ハプスブルク家貸付業務。皇帝ルドルフ2世 Rudolph II. との金融取引は、1592年トルコに対する軍備のため2,250グルデンを兄弟が領主の資格で納めたことに始まる。⁷⁾翌年大トルコ戦争 der große Türkenkrieg (1593—1606) が開始され、皇帝の要請で兄弟は1596年に5万グルデン、翌97年に更に43,000グルデンの貸付を行なったが、これらは土地所有と関連づけられ、⁸⁾会社の貸借対照表及び総決算には皇帝に対する債権は計上されていない。これに反し皇帝の叔父に当たるティロール太公フェルディナント Ferdinand との金融関係は遥かに緊密なものであった。太公と会社との最初の金融業務は1580年に締結された14,000グルデンの貸付として初めてこの年の貸借対照表に現われるが、⁹⁾珍らしいことにこの貸付はモンタフォン Montafon の鉱山業と関連を有した。しかし1582年に会社は採鉱所の持分を売却したので、商會が問屋制資本家として鉱山業に進出する唯一の機会が消滅することになった。

豪奢な宮廷を有した太公は1582年に2口計16,000グルデンの貸付を会社から受け、さらに1587年に4,000グルデンを借り、すべて支払は延期され、会社に対する太公の債務は計34,000グルデンとなった。¹⁰⁾この債権は結局、ハル製塩所の収入から毎年1,700グルデンの「年々永代利子」 einer „Jährlichen und ewigen Zins“ を受け取る永代年金の形で解決された。その後1590年にも太公は会社から5,000グルデンの新たな貸付を受け、これは太公の死後分割払いで返済された。だがこの間に商会の活動分野はイベリア半島に移っていたのであり、その間の事情については以降において観察したい。

7)これは皇帝の „Türkenhilfe“ に関する重なる要請に応じて150名の射手を3か月維持する費用として兄弟が納めた。R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“*, 1966, S. 116. 尤もこれより10年前、1582年のアウクスブルク帝国議会開催中、皇帝がオクターヴィアン・ゼクンドゥスに出頭を命じた時、そこで「金の交渉をしようと思っている」 „gelt handlungen pflegen wölle“ ことを予想した彼は、商会は今スペイン国王フェリーペ2世 Felipe II. とマルクス・フガーに24万グルデンを直ぐ支払わねばならないので、金額の多少を問わず貸付する積りはないと回答した。だが事実は反対で、マルクス3世がライムント系の兄弟に離脱に由来する大金を払わねばならなかったものであり、またフェリーペ2世も当時商会に可成りの借金を有していた。従ってこの口実は、マルクス3世が貸付拒絶に利用した手口を逆用したものに他ならない。R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 113—114.

8)皇帝は大トルコ戦争が勃発した時、軍隊の給与支払のため5万グルデンの資金援助を会社に要請し、担保としてヴィーンの商人 Bartholomäus Castell の15万グルデンの借用証書の写しを提示した。だがフィリップ・エドゥアルトはこの保証を不十分と見て、Grafschaft Kirchberg と Weißenhorn の買戻権延長の抵当金12万グルデンから5万グルデンを分割払いを行うことにした。続く43,000グルデンも同一の性質のもので、この二口の金額は Reichspfennigmeister Zacharias Geizkofler によりトルコ戦争のための „Extraordinari Hilfe“ として記帳された。R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 114—115.

9)モンタフォンの溪谷にある鉱山は Feldkirch と Bludenz の東南に在り、現在は Silberthal と呼ばれている地であるが、「ブルーデンツ領の鉄鉱山に地歩を占めようと

努力した」アウクスブルクの都市貴族 Konrad Mair d. Ä. の息子 Konrad Mair d. J. が1578年に、この新鉱山の持分をハンス・ベヒラーに譲渡した。同年10月31日にマイアとライムント系の兄弟とが結んだ契約から、この譲渡はベヒラーが商会の委任を受けて行ったものであることが分かる。R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 117—119.

10)1582年の貸付は1万グルデンが年利7%で期限は1年、6,000グルデンの利子は5%であった。*Ebenda*, S. 119.

3

イベリア半島における商会の経済的活動の由来は、フィリップ・エドゥアルト兄弟の叔父に当たるクリストフが1579年に死に、子供がいなかった¹⁾ので50万グルデンに近い大きな遺産が転がり込んで来たことに在る。この遺産の一部はスペインで支払われたので、商会のマドリード支店長クレルがこの債権の取り立てに当たった。この債権はクリストフがフガー本社の「スペイン取引」*Spanische Handlung*に有した確定利子付預金とスペイン王室に対する「指定」*Consignation*のない貸付とより成っていた。王室に対する債権は10年近くも後に、しかも国王の役人たちに3,654ドゥカーテン 353マラベデイスの「進物」*Verehrungen*をして、やっと支払われたのだが、この際フガー社の当主マルクス3世の経営方針とスペイン王室の財政事情とが、ライムント系兄弟のスペイン資金の操作に大きく影響した。16世紀80年代にスペインの貴金属船団がペルーとメキシコから齎した収入は、大部分が王室の外国人債権者に対する債務返済に充当され、残余はネーデルラントに在る軍隊の給与に当てるための為替で送金された。マルクス3世はフガー社の「通常取引」の健全化を計り、他人資金の排除に努めていたので、本社の債務を有利な条件で支払うためにこの機会を利用した。彼は *die Fuggerischen Erben* が本社に対して有する債権を整理し、支払いをスペインで行う方針を堅持した。これに対し差し当たりスペインで安全利な投資先を見出だせなかったフィリップ・エドゥアルト兄弟は、彼らの預金投資を何とかして永続

させようとした。こうして1584年には、満期になった10万ドゥカーテンについてはマルクス3世が兄弟の「度重なる求めと願い」 „vilfältig ersuchen und drengen“ を容れて半年間の延期を認めたものの、その利率は3 $\frac{1}{4}$ %という異常に低いものであった。

- 1) 「マルクス3世が1580年12月1日にゲオルク2世の息子たちに宛てた利子支払の詳しい一覧表。クリストフ1世は1570—77年にスペインにおいて丈で計 403,966fl. 9kr. の利息を受け取った。これは毎年50,495fl. 46kr. の利子金額に相当した。年5%に過ぎぬ利率の場合には、これは約 1,009,915fl. の預金額となった。クリストフ1世の全財産は死んだ際、約 1,600万グルデンに達した。」 R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“*, 1966, S. 70, Fußnote 180.

こういう事態であったので商会のマドリードの支配人クレルは、スペインで行われていた投資法である Juros と Censos をアウクスブルク本社に薦めたいが、これについては若干の説明を要する。Juros の起源はカスティーリャのエンリケ4世 Henrique IV. (1454—74) の債務証書に遡る。これは臣下に対する褒償や貸付の利払いとして王室が支給した終身年金をその実体としたが、利率は王室財政の事情により一方的に変更された。それは一切の課税を免除され、譲渡にはカスティーリャ財務当局の長である Consejo Real de Hacienda の „Fiscal“ の「承認」 „Privilegium“ を要した。これに対し Censos は国王の認可を受けて個人が出す抵当証書で、不動産融資を実体とした。その利子はこの頃7 $\frac{1}{4}$ %で、期限付きの „ablösig“ と無期限の „unablösig“ とがあった。従って Juros も Censos も長期に亘る収入の短期的資本化を目的とし、アウクスブルクの両取締役は差当り遊んでいるスペインの資金から「経常的収入」 „ain steet einkommen“ を得るためにその買入れをクレルに指令した。こうして1584年から87年までに Censos に63,500ドゥカーテン、Juros に50,186ドゥカーテン 202マラベディス投資され、1587年末の総決算には

1 ドゥカーテン＝827クロイツァーで換算して155,371fl. 36kr. 1 h. が計上されたが、その内訳は次表の如くである。

| 金 額 | 種 類 | 内 容 |
|--------------|--------|---|
| 17,000Duk. | Censos | Don Francesco de Mendoza, 保証人Pero Ortiz de Eciza 及びAlonso Camino |
| 7,000 | 〃 | Don Luiz de Toledo, 保証は彼の„mayorazgo“ |
| 7,000 | 〃 | Princesa de Ascoli |
| 14,000 | 〃 | Doña Eufrosia de Guzman |
| 14,000 | 〃 | Villa Nueva de los Infantes町の収入 |
| 2,000 | 〃 | Villa de los Morales村の収入 |
| 2,500 | 〃 | Villa Argamazilla de Alba村の収入 |
| 37,333.125m. | Juros | 年利7 $\frac{1}{4}$ %, 保証はAlcabala zu Sevilla ²⁾ |
| 12.853.77 | 〃 | 年利7 $\frac{3}{4}$ %, 保証はAlmoxarifazgo von Sevilla ³⁾ |

2)議会Cortesによって承認された取引高税で、14世紀に設置され15世紀末には10%であったが、1575年フェリーペ2世により3倍に増徴された。

3)カディス Cadiz その他の港で徴収された海関税。

ところがこの間にアウクスブルクの両取締役は経営方針を大きく転換することを決意した。すでに1585年に商会はウェルザー家 die Welser の勧誘に応じ、後述する「アジア契約」„Asien-Kontrakt“への資金参加を声明し、1588年1月18日には支配人クレルはすべての債務証書をマドリードで買値で処分せよとの指令を受け取った。JurosとCensosの入手は骨の折れるものだったが、さてこれを売却する段になると、仲々容易ではなかった。Jurosは王室財政の事情によって、利率が一方的に引き下げられたり、利払いを拒絶されたりして、利息を順調に受け取るためには役人に対する賄賂が必要だったりしたので、一時はその取引価格は名目価格の半分にも下落した。Censosについては債務者の人物が問題で、彼らは僧俗の有力者であったので、その契約の不履行に対する「法の手続き」„per via de iustitia“にも大きな圧力が

かけられた。それ故、前に表示した債務証書の四番目以降は何とか買手を見つけたことはできたが、最初の三つの処分は難行した。

4

商会の帝国内での貸付は 計20万グルデンであり、スペインの Juros と Censos への投資も約 155,000グルデンであったが、これから述べる「アジア契約」に関連する貸付は約25万グルデンに達した。商会にとって金額の面からだけでもこのように重要な意義を有したアジア契約は、1577年3月1日にそれまでポルトガル王室の独占企業であった東インドの香料輸入に私企業の参加が認められたことから発生した。ポルトガル王室と数年に亘る契約を締結した商家は「契約人」 „Contractadores“ と呼ばれ、数隻の船を傭船し、艀装し、一定の買入価格で各種香料の協定量をインドで購入して輸送し、諸経費に一定額を加算した価格でこの香料をリスボンの王立倉庫 „Caza das Indias e Mina“ に引き渡す義務を負った。ウェルザー家の薦めで1586—91年のこういうアジア契約に参加することを決意したフィリップ・エドゥアルトとオクターヴィアン・ゼクンドゥスは、自分たちの新しい会社は「こういう取引の経験はない」 „diser handlung nit erfahren“ し、必要な人員も有していないが、胡椒は「常に捌ける商品」 „ain wahr, die steeten schlei“¹⁾だから、資金的にのみ関与するのを有利と判断した。こうしてミラノ人口ヴェラスカ Giovanni Battista Rovelasca が $\frac{7}{12}$ 持分、ウェルザー社 Markus, Mathäus Welser & Gesellschaft が $\frac{5}{12}$ 持分を有するこのアジア契約に「如何なる理由でも名前を出さず、万事ウェルザー家にやらせる」 „namen aus allerley ursachen nit führen, sonder alles auf der Welser stellen lassen“²⁾ ことにして、ウェルザー社の持分から $\frac{5}{12}$ 持分の譲渡を受ける契約を1587年4月17日にアウクスブルクで締結した。

1) R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen“*, 1966, S. 145—146.

2) R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 146.

ライムント系の兄弟が有利な業務と判断したこのアジア契約の具体的内容は次の如きものであった。契約人は毎年3万キントル Quintal のインドの胡椒をリスボンの倉庫に納めるため17万クルサドス Cruzados を調達する。従って胡椒の仕入価格はキントル当り5 $\frac{3}{4}$ クルサドスである。この他に船団を艤装するための費用24,000Cr. が必要であるから、商会は計194,000Cr. の $\frac{1}{4}$, 48,500Cr. を分担することになる。インドでの仕入価格が予定よりも高い場合には「超過分」 „demasia“ が2 Xerafines まではその半額を契約人が引き受け、2 Xerafines を超える分については王室が補償する³⁾。支払いは胡椒の売上より行なわれ、キントル当り運賃4Cr. を加えて12Cr. とする。その他の管理費や人件費は契約人が負担するが、その代わり „merced“, „arbitrio“ と呼ばれる優遇が認められ、これによって契約人は丁子、肉桂、桂皮などの „droguas“ を毎年450キントルに限り輸入税を免除されてヨーロッパで販売できる。輸送中浸水その他で傷んだ商品は2 $\frac{1}{2}$ %まで良質の胡椒と交換される。国王は契約期間中はインドからの胡椒輸入に関する別の契約を締結せず、契約人には20万Cr. の転売可能な Juros が渡され、契約の終了に返還することにして、出資金の利子保証に当てられた。

3) 4 Xerafines = 5 Cruzados

商会のアジア契約の業務はウェルザー社のリスボン支店長マンリヒ Hans Christoph Manlich が指揮したが、やがてフガー兄弟は彼の決算が不正確であり、債権の徴収が手ぬるいとして、その経営管理に不満を抱くようになった。この際前述の優遇は契約人のみに与えられ、「主要契約人」 „Principal-Contractadoren“ であるウェルザー社は、兄弟に対し「契約の一切の利益を特別文書で保証」 „alle beneficia des Contracts In ainer sonderbaren schrift

Cediert ⁴⁾したが、この協定は国王の承認を受けたものでないから、兄弟としてはウェルザー社の誠意に期待する他はなかった。そこで兄弟は当初の方針を変更して「われわれの名でやる」 „uff unsern namen zukomen“ ⁵⁾ことを決意し、1588年6月16日に主要契約人としての承認を受け、以後 die „Georg Fuggerischen Erben“ 社はアジア契約の $\frac{1}{4}$ 持分について自社で管理を行なうことになった。

4) R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“,* 1966, S. 151.

5) R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 151.

それまではアジア契約に従事する商会の使用人は、マドリッド支配人の甥クレル Hans Jakob Krel がリスボンに配属されてウェルザー商会のマンリヒ支店長の配下に置かれたのと、現地インドにおける両社共同の支配人であるクロン Ferdinand Kron の部下としてシュネーベルガー Christian Schneeberger が1587年にゴアに派遣されたただけであった。自社の業務を独立で管理するために商会は1589年にハルトリープ Joseph Hartlieb をイムホーフ商会から引き抜いてリスボン支店長に任命し、⁶⁾翌90年に H. J. クレルとリッチャー Philipp Litscher を彼の部下に配属させた。インドではクロンが指揮を取り続けたが、シュネーベルガーが重い病気で動けなくなったので、彼を助けるために1589年に東印度貿易の経験のあるツェングマイスター Sebastian Zangmeister ⁷⁾とホルツシューエル Gabriel Holzschuher とが採用された。

6) 1586年から91年までゴア支店を指揮したクロンは、それまでは Markus, Matthäus Welser und Gesellschaft に勤めていたらしい。フガー兄弟は彼を「ウェルザーの使用人」と呼び、その処置に不信を抱いた。シュネーベルガーはそれまでフィリップ・エドゥアルトの下にいて、スペインにもいたことがあり、両取締役の Ph. Krel 宛の手紙には「相当の年配で分別のある」男と記され、「スペイン語と書記の仕事に可成り経験を有する」と評価されている。ハルトリープはそれまでニュルンベルクの商会 Endres und Jacob Imhof のヴェネツィアの使用人であった。リスボン支配人とし

ての俸給は年 1,100 ドゥカーテンであった。R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“*, 1966. S. 94—97.

- 7) ツェングマイスターはアウクスブルク商家の出で1583年にゴアにいた。ホルツシューエルはニュルンベルク Nürnberg の出身で Leonhard Tucher und Mitverwandte 商会で働き、1579年にはアウクスブルクの商人 Konrad Rot の委託でゴアに旅行し、その後ゴアで幾人かのヨーロッパ商人に仕えた。兩人とも 800 ドゥカーテンの年俸で2年間の契約でフガー兄弟に雇傭された。R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 97—98.

それでは新らしく配置された商会のこれらの使用人の仕事の内容はどのようなものであったか。先ずリスボン支店の業務は、協定した金額を倉庫事務所に納め、良い船の手配をし、船団到着後は定められた支払を受けて、次の仕入金の調達に備えることであった。この際最大の困難はリスボンでの香料販売が円滑に行なわれなかったことで、その原因は王室は出来る丈高い価格を期待したが、買手の商人は王室の財政難を知っていたのでこれに応じようとはしなかったことにある。現地インドの業務もこれに劣らぬ難問を抱えていた。先ずポルトガルの植民地行政の乱脈が大きな障害となった。支配人クロンが「兵隊に払う金是一文もない」*kein Pfennig vorhanden ain Soldato zubezalen*⁹⁾ と報告したような状態にあった現地の軍隊は、胡椒買上の現金を奪ったり、買上胡椒を掠奪して換金する恐れがあった。またこの業務にはリスボン向けの船舶手配が非常に重要であったが、「ポルトガルで造られる船は皆、3航海を済ませた後はすっかり古くなって腐ってしまう」*alle schiffe, so in Portugall gemacht werden, nachdem 3 Viage gethon, alle alt und podrido sein*⁹⁾ のに、船主が「船舶検査官」*visitadores de navios* と結托しているので、出航に際して船が沈没する事故も稀でなかった。さらに官職売買によりヨーロッパ行きの船の「水先案内」*piloto* には 400乃至 600 ドゥカーテンを払わねばならなかった。そして最後に肝腎の胡椒仕入自体が容易ではなかった。現地生産者は収穫を偽って価格の引上を計り、良質の商品は良い値で *Mohren* と呼ばれたアラブ商人の手に入ることが多く、土着支

配者が定価で胡椒引渡しに同意したのは、ポルトガル当局が圧力をかけた稀な場合に限られた。尤も購入価格が定価を超過した場合の補償の規定はあったが、この「超過分」の補償請求には副王 Vizekönig の指令の写しが必要だった。ところがインドの政府は高値の仕入を許したが、「超過分」の責任を取るのを拒んだので、ポルトガル及びスペイン宮廷での長年に亘る交渉が生じ、世紀の代わり目にやっと協定が成立する有様であった。

8) R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“*, 1966, S. 154.

9) R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 155.

こういう状態だったので、契約した6年間のどの年も予定の3万キンタルがリスボンに到着したことはなかったのであるが、この1586—91年のアジア契約の経過は大体次の如くである。1586年3月に契約の最初の船団はリスボンを発ったが、翌年晩秋に戻って来たのは期待した5隻ではなく „S. Thomé“ 号と „Nostra Señora de Concepción“ 号の2隻だけで、積荷の胡椒は10,368qtl. に過ぎず、そのうち更に640qtl. は「屑」 „quebra“ であった。クロンとその部下は現地で大いに苦勞して更に14,592qtl. を高価格で購入して船積みしたが、 „Reliquias“ 号はゴアを出航する際1,638qtl. の積荷と共に沈んだ。 „S. Salvador“ 号は東アフリカ海岸で難破し、ポルトガル海軍により Ormus に曳航された。5番目の „S. Felipe“ 号はゴアに赴かず Moçambique で前の契約の商品を受け取って帰航中、英国船に拿捕された。次の „Santa Maria“ 号はリスボン出航後間もなく、アゾレス諸島沖でイギリス海賊船に襲われ、損傷を受けて引返してきた。従って 194,000Cr. の投資は 164,979 Cr. 80rs. の総売上しか齎さなかった。ゴアで積み込んだ胡椒の71%がヨーロッパに着き、到着した胡椒の6.2%は「屑」であった。1588年には順調な成績が見られ、クロンが5隻の船で送った22,963qtl. は全部リスボンに到着し、「屑」は6.5%だったので365,562Cr. 160rs. を請求することになっ

た。1589年も可成り良好で、4月4日アジアに向かって5隻の船が出航した後、9月16日に帰航した船団は24,163qtl.の胡椒を積んできた。1587年にOrmusに曳航されたS. Salvador⁹号の積荷もこの中に入っている。S. Thome⁹号だけは5,877qtl.の積荷と共にNatalの海岸で沈んだが、アゾレス諸島付近で嵐で難破した船の積荷は大部分無事だった。インドから発送された30,042qtl.のうち80.4%が到着し「屑」は6.7%だったので、382,400 Cr. 360rs. をポルトガル財務当局に請求できた。だがこの順調な入荷により胡椒の値崩れが生じ、王室の要求する価格での買手は見つからなかったが財務当局はアジア契約者に対する債務を売上から支払うわけだから、新しい船団の艤装に当たり商会はマドリードとリスボンの支配人に、王室が契約を履行することを主張するよう繰返し指令せねばならなかった。こういう事情だったので、次の船団がやっとリスボンを発ったのは1590年5月8日で、Santa Cruz⁹号は出航の際マストを破損して航行できず、Nostra Senora de Concepción⁹号、S. Cristóbal⁹号及びS. Juan Battista⁹号は風が悪くて返き帰して来、S. Antonia⁹号はブラジルに漂着し、翌年ゴアに着いた。ところで1589年秋に引渡された香料については、現金支払の代わりに胡椒で受取ることをリスボン支配人ハルトリープ Joseph Hartlieb は1590年に承諾せねばならなかった。1589年春にリスボンを発った船は翌年9月23,682qtl.の香料を積んで戻って来たが、これも胡椒で支払われた。最後の船団は1591年4月4日に6隻でアジアに向かったが、S. Cristóbal⁹号だけが翌年秋に3,438qtl.の胡椒と共にポルトガルに着き、Santa Cruz⁹号は英国海賊船から逃れる際に炎上し、Buen Jesu⁹、S. Bernardo⁹及びS. Luiz⁹の3隻は消息を絶った。最後のMadre de Dios⁹号は7,101qtl.の胡椒と共に英国私拿船に連行され、その積荷の返還要求をした商会には、ロンドンの依託人に対する425グルデンの費用支払だけが残った。こうして、フガー兄弟は「スープは想像したほど濃くなかった」¹⁰⁾ die supp nit so faist sein wurd, als man wol vermaint hat⁹ ことを契約の経過から学んだわけである。

- 10) クロンとシュネーベルガーに宛てた1591年1月5日の手紙。R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“*, 1966. S. 162.

5

アジア契約の支払いが現金でなく現物で行われるようになったことは、香料販売のカルテルである「ヨーロッパ契約」 „Europa-Kontrakt“ に加入することを強要した。die „Georg Fuggerischen Erben“ 社はこれまで「インド商館の賃借」 „Arrendament des Hauß von India“ は「われわれの仕事でない」 „nit unsers thuens“¹⁾ として、ヨーロッパ契約への参加を拒否し、その理由として、王室がアジア契約の規定を履行しないこと、巨額の資金を要すること、²⁾ スペイン及びポルトガルの行政が信用できないこと、船舶事情が悪化していることを挙げた。しかし1590年にリスボン支配人ハルトリープはキンタル当り38クルサドス以上の換算価格で胡椒を受け取らされ、1591年艀装予定の船団の手配する資金を調達するために、大きな損をして商品を手放さなければならなかった。1591年にも同じ事態が生じ、財務当局は再び現金支払を拒絶したが、フガー兄弟は差し当りヨーロッパ契約を結ぶ積りはなかった。しかし1590年5月に遅れて出航した5隻のうち4隻がインドに行けなくなり、翌年の胡椒輸入の見込がなくなったことは、相場の上昇を期待させた。そこで1591年4月8日に締結された2年間のヨーロッパ契約に商会は7持分参加³⁾ することになった。

1) すでに1587年1月31日の Ph. Krel 宛の手紙でこの意向が表面され、その後も繰り返し強調されている。R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“*, 1966, S. 166.

2) 「アジア契約に必要な年々の金額は 200,000 Cr. に上り、ヨーロッパ契約のためには 800,000 Cr. さえも必要だった。」1591年3月2日ハルトリープ宛書翰。R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 165, Fußnote 173.

3) この契約に参加したのは、フガー兄弟の他にポルトガルの商会 Tomas & Andrea

Ximenesが12持分、ウェルザー社が5持分、G. B. Rovelasca とG. Parisが共同で4持分、スペインの商家 Francesco & Pedro Malvendaが4持分を有した。少したつて Ximenes家は更に2持分を Malvenda家から譲り受けた。Edenda, S. 167.

このヨーロッパ契約の締結に努力した支配人ハルトリープは取締役から、契約参加は「大きな越権」 einer „starkhen ubergriff“⁴⁾ であるとして叱責され主人の「移り気」 „wanckelmuet“⁵⁾ をこぼした。とにかく契約締結後数か月で商会はリスボン支配人に持分を売却することを指令した。この7持分は長い交渉の後1592年春にデボーラ Ruy Lopez d'Evora に譲渡された。この経営方針の急転換の原因は契約パートナーのシメーネスXimenes家が胡椒の安売を行なったことにあった。しかしながら商会は止むなく当分は「特殊な品が片づくまで待つ」 „biß die Particulares aufgeraumbt zuzusehen“⁵⁾ ことにした。

4) R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“*, 1966, S. 167.

5) R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 169.

それではヨーロッパ契約への参加は経営的に失敗であったかと云えば、会社の貸借対照表はまさにその逆を証明している。ハンブルク、リューベック及びアムステルダムへ送られた胡椒の中、海損と海賊に奪われたのは4.7%で済んだ。両取締役はヨーロッパ契約からの総利益はせいぜい5%に過ぎないと述べているが、これは彼らが当時強く非難していたハルトリープに宛てた報告であるから、実際の利益はもっと大きかったと思われる。⁶⁾ 大陸契約とヨーロッパ契約とを含む「胡椒契約該当分」 „die Pipper Contract betreffend“ の債権は1590年には233,180fl. 33kr. 5h. であった。翌91年には未だ107,825fl. 37kr. 6h. が未収となっていた。商会がヨーロッパ契約に加わった時、この貸方勘定は1年以内に29,221fl. 35kr. 5h. に減少し、1595年以降はこの種の債権は貸借対照表に見られない。従って商会はヨーロッパ契約への参加に

よって、上述したような多くの障害にも拘らず、香料取引に関する両契約に投下した資本を回収できたわけである。

- 6) 1592年8月1日のハルトリープ宛の手紙。R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“*, 1966, S. 169.

6

オクターヴィアン・ゼクンドゥスは1600年に死に、兄のフィリップ・エドゥアルトは1618年まで生きていたが、商会の営業記録は1602末の貸借対照表で終わっている。約四分の一世紀に亘るこの会社の経営活動の概要を見て来て、その企業性格を確認するためには、16世紀後葉の企業環境を顧る必要がある。30年戦争の経済的意義を追求したリュトゲ Friedrich Lütge は、1550—1620年の期間にドイツの経済は発展を続けたか、それとも停滞に陥っていたかという問題を論じ、この期間は「16世紀前半の隆盛に対する下降によって特色づけられ、その限りにおいて30年戦争におけるあの経済的崩壊の序曲」¹⁾であるとする支配的見解に対して、この期間は「明らかに先行2世紀と同じものである」²⁾と主張した。リュトゲはこの期間の商工業について「ある都市や経済部門の衰退は他の諸都市や他の経済諸部門の興隆によって償って余りある」³⁾ものがあり、「重要な経済諸部門はまさに30年戦争勃発前数十年間に明白且つ重要な興隆を体験した」⁴⁾という結論を出し、農業についても簡単に触れて「全然衰退を示していない」⁵⁾とした。アーベル Wilhelm Abel もリュトゲのこの見解に組みし、リュトゲが16世紀の工業及び商業の発展について述べたところを農業の面について補い、都市の所得と財産について論じられたことを農村について考察し、16世紀におけるドイツの総生産の絶対的増大は是認したが、人口1人当りの相対的増大は否定した⁶⁾。

- 1) Friedrich Lütge, Die wirtschaftliche Lage Deutschlands vor Ausbruch des Dreißigjährigen Krieges, *Jahrbuch für Nationalökonomie und Statistik* [以下 *JbNStat.* と略記], Bd. 170, 1958, S. 47.
- 2) F. Lütge, *a. a. O.*, S. 99.
- 3) *Ebenda*, S. 87.
- 4) *Ebenda*, S. 91.
- 5) *Edenda*, S. 96.
- 6) Wilhelm Abel, Zur Entwicklung des Sozialprodukts in Deutschland im 16. Jahrhundert, *JbNStat.*, Bd. 173, 1961. 筆者もこの論文を紹介した。拙稿「16世紀ドイツの社会生産物の発展」産業経済研究, 第3巻, 第2号, 1962.

ケレンベンツ Hermann Kellenbenz はこう述べている,「スペイン, フランスその他の『国家破産』と結びついた上ドイツ大商家の損害も過大視された。こうして失われた商業利潤がドイツに留まったとしても, それは生産設備には殆んど投資されず, 奢侈品と消費財の購入と領地の取得に使われたであろうし, おまけにこれら大企業者たちはもう3代目や4代目で, 商人的活動をやめて領主に転化する傾向を示した……アウクスブルクについての調査⁷⁾がまさに示したことは, 小数の大資産に代わってもっと広い集団が現われた。」

- 7) Hermann Kellenbenz, Gewerbe und Handel 1500—1648, *Handbuch der Deutschen Wirtschafts- und Sozialgeschichte*, Bd. 1, 1971, S. 462.

シュタインメッツ Max Steinmetz はこう説明する,「経済の初期資本主義的部面は, 適応を強要した封建的環境の中に埋まっていた。その結果が商業及び高利貸大資本家の封建化, 彼らの貨幣の土地所有への流出だった。」⁸⁾だが彼も次の点に注意をうながす,「上ドイツ諸商家の没落は商業資本の国際的役割の後退を覗わせるが, ドイツ国民経済の全般的衰退を直ちに意味しない。」⁹⁾大資産の流通からの消滅と並んで中小資産の形成が続いた。」

- 8) Max Steinmetz, *Deutschland 1476—1648*, (Lehrbuch der Deutschen Geschi-

chte, 3. Beitrag) 1967, S. 213.

9) M. Steinmetz, *a. a. O.*, S. 213.

こういう社会経済的状况の中での上述した die „Georg Fuggerischen Erben“ 社の企業性格は明らかであろう。取締である兄弟は封建領主として帝国の貴族であると共に、帝国都市アウクスブルクの都市貴族の一員でもあった。彼らの人文主義的教養とジェスイット教団への傾倒は、その政治的社会的立場に適合していた。封建的支配階級に対する金融業務がこの商会の出発点であり、基盤であった。彼らが相続財産を確保するためにイベリア半島で Juros と Censos の購入に努めたのも、商品の生産乃至流通に直接携わるよりも貨幣業務を優れた仕事と考えた彼らの意向に沿うものであった。香料取引への参加も最初は金融業務として開始され、その投下資本を回収するために否応なくアジア契約からヨーロッパ契約へと手を広げざるを得なくなるや、両人は1年後にはその持分を処分して投下資本の回収を計った。商会の貸借対照表が示しているように兄弟は、利益はできるだけ早く会社から引き去ったから、商会の業務活動は後退の一途を辿り、土地所有の整理拡大が見られた。フィリップ・エドゥアルトがその人文主義的教養の趣向から長期に亘って蒐集した世界各地のニュースは、現存している有名なフガー時報 Fuggerzeitungen の根幹を為すものであるが、これに納められている東インドからの報告も、¹⁰⁾ 商会のアジア契約の経営遂行に対し殆んど効果を齎すことのなかったことは、両取締の経営姿勢を如実に物語るものである。そこでヒルデブラントはこういう結論を出した、「経済界の支配権ではなく、相続した財産の維持と増大が、フィリップ・エドゥアルトとオクターヴィアン・ゼクンドゥスの努力の目標だった。」¹²⁾そして彼は更にこうも判定する、「彼らの業務活動は彼らの貴族的模範を目指す生活類型の実現と貫徹とを可能ならしむべきものだった。」¹³⁾ われわれは更にこうつけ加えることができるだろう、利益よりも安全、経済的活動よりも社会的地位が両取締経の営方針であり、これが

商会の企業性格を決定的に規定した。彼らのいさぎよしとしない商業資本家としての活動、不安の絶えぬ高利貸資本家の業務という実態を考慮に入れるなら、相続財産を企業経営から封建的土地所有に移して、都市貴族兼封建領主として企業経営より手を引いて上昇転化する以外の途は、彼らに残されていなかった。

10)フガー時報については拙稿「フガー時報に現われた日本」久留米文学会紀要、第4号、1958、19—23頁。

11)Victor Klarwill, *Fugger = Zeitungen, Ungedruckte Briefe an das Haus Fugger aus den Jahren 1568—1605*, 1923, S. 126, 138.

12)R. Hildebrandt, *Die „Georg Fuggerischen Erben“*, 1966, S. 189.

13)R. Hildebrandt, *a. a. O.*, S. 189.